



# くらがね通信

No.93 (春号)

乗鞍岳と飛驒の自然を考える会

2024年4月15日発行

<http://iidalaw.net/norikura.html>

## 環境講演会 「野鳥も人も地球のなかま」

～ 御嵩町リニア残土計画・大阪万博・勇払原野風力事業と野鳥たち～

公益財団法人日本野鳥の会 施設運営支援室：大畑孝二さん

録音文字化：住 壽美子

### 野鳥の会について

日本野鳥の会は昭和9年（1934）3月11日に、中西悟堂を会長として設立され今年で90周年になる。彼は金沢の生まれで、僧侶、歌人、鳥の本の文筆などをやっていた人である。当時は野鳥を籠に入れて鳴き声を楽しむ時代であった。最初の探鳥会は富士山ろくの須走で開かれ、北原白秋や柳田國男・金田一京助などの錚々たるメンバーが参加している。鳥の研究も皇族・貴族から始まり、現在のように一般市民の参加はなかった時代である。その後、悟堂と親交のあった人たちが各地に広まって地方の支部ができた。岐阜支部は数年前に50周年を迎えている。野鳥の会のキャッチフレーズ「野鳥も人も地球のなかま」は鳥が住めないような環境には



大畑孝二さん

いずれ人も住めないということであるが、昔は「鳥が大事か、人が大事か」と迫られることがあり、中々理解が得られなかった。

野鳥の会では鳥好き・自然好きの人を大事にしようと探鳥会などの活動を行い、今は「野の鳥は野に」とバードウォッチングして鳥を観察するのが当たり前になっている。「野鳥」という言葉は中西悟堂が生んだ言葉で探鳥会という言葉も彼の造語と言われている。現在の会長は6代目で立教大の名誉教授で鳥類学者である上田恵介氏である。前会長は柳生博氏で色々ところで講演をいただいた。

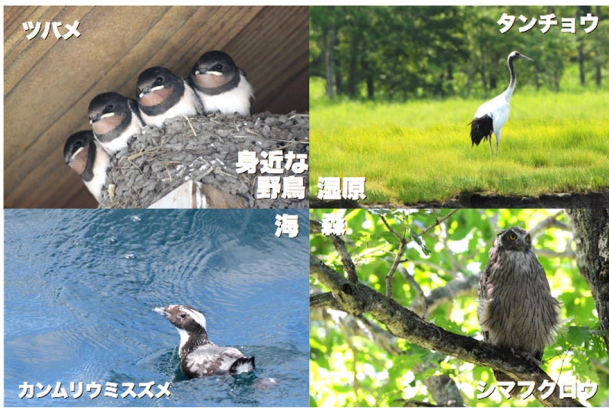
現在会員は寄付や物品を購入してくださっ



当会誌「野鳥」2014年4月号より

■創設者は中西悟堂

B 公益財団法人日本野鳥の会  
Wild Bird Society of Japan



日本野鳥の会 野鳥を守る取り組み

B 公益財団法人日本野鳥の会  
Wild Bird Society of Japan

たサポーターも含めて5万人くらいで減少傾向であるが、かつては会員だけで5万人くらいいた。東京の五反田に事務所がありパートも含めて100人くらいのスタッフがあり、直営或いは委託で自然系施設の運営などを行っている。

その他の活動としては、ツバメの保護活動をしてくれる団体を支部推薦で表彰をしたり、北海道のタンチョウについては保護活動や、生息環境の保全活動、タンチョウの棲む湿原の保全も行っている。野鳥の会が釧路湿原のほりに施設を作ったが、その頃は385羽くらいで冬場エサがないので絶滅するのではと心配されたが、農家の人たちの給餌活動のおかげと行政も加わり、今は2千羽程が確認されている。3大給餌場で動物園の鶴みたいにエサを与えることが続いたので、今は給餌量を減らし自然の状態で冬を過ごさせるようにしむけている。今は勇払原野でもタンチョウが繁殖するようになった。

シマフクロウは魚を主に採っている鳥で川と森がないと住めない。北海道だけに見られ「シマ」は蝦夷ヶ島（えぞがしま）の「島」である。大きなフクロウで30～40年前は100番を割っていると言われていた。大きな樹洞がないので環境省や研究者が頑張り、大きな巣箱と給餌用のヤマメを与えた。野鳥の会では寄付のお金を使って民有地を買い保護活動を行っている。怖いのはカメラマンが中に入ることなので、生息場所は公開されていない。

カンムリウミスズメは日本近海のみで生息し絶滅危惧種のため人工の巣をつくるなど生態調査や保全活動をしている。

戦前から野鳥を一網打尽にするかすみ網猟が問題視され、昭和22年には禁止になったが、その後も半ば公然と行われていた。進駐軍が帰

ればまたできるからと復活の動きがあったのが岐阜県である。特に東濃地方で盛んだった。岐阜県支部の創始者である丹羽宏氏が中心となってかすみ網猟の反対運動に取り組んできた。

サンクチュアリ運動として、開発でいなくなる鳥や自然を守るために大切にしてくれる人を作っていこうと第一号のサンクチュアリが苦小牧市のウトナイ湖にでき、1981年にオープンした。私は83年からレンジャーとして赴任し12年いた。それと同時に環境庁（当時）は国として都市近郊の身近な自然を守りながら人々に自然に親しんでもらう「自然観察の森事業」を始めた。10年間に1年に2か所ずつ作ろうという計画で、豊田市自然観察の森は8番目だった。第1号が横浜自然観察の森で、現在野鳥の会が横浜市から指定管理者として委託を受けレンジャーが居る。

施設を作る費用は国・都道府県・自治体がそれぞれ3分の1ずつ負担し、その後の運営は地元自治体に任されている。豊田の場合は途中から市から野鳥の会へ声がかかり施設運営を任された。ここのネイチャーセンターはとても立派で8億円かかっている。当初作った施設は現在標本資料館になっている。身近な自然を守りながら普及教育活動をやっている。

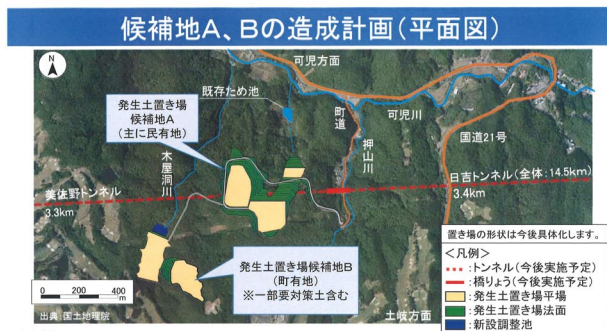
当時も野鳥の会は環境庁と良い関係で、ウトナイ湖に施設を作った際全国各地にこんな施設ができたらいということ、環境省も10か所作った。横浜・豊田・福岡・広島・姫路の5か所については当初運営を手伝ったが、今は横浜と豊田のみ運営している。他の施設は地元の団体などが関わっている。当会の直営施設はウトナイ湖とタンチョウの鶴居村の施設だけで、それ以外は行政から委託などを受けている。

私の勤めている「豊田市自然観察の森」は、



豊田市の里山環境のある場所にある。そこにはコナラ・アベマキなどの二次林やツブラジイなどの極相林も見られる。約30ヘクタールが条例で決められた所で、周辺の里山環境の保全も行っている。その一画に矢並湿地という狭い湿地があり、シラタマホシクサ、ミカワシオガマなどの固有の植物がみられ、キビタキ、ムササビ、ササユリ、カブトムシ、クワガタムシなども棲息している。ここをラムサール条約湿地にする活動を行い登録された。

### 御嵩町リニア残土計画について



リニア中央新幹線は2027年には東京～名古屋間がつながる予定だった。この新幹線はほぼ地下を通りトンネルを掘るため、実験線を作った際に地下水が抜けて川が枯れてしまうという問題が起きた。その関係で大井川の上流を掘られたらかなり水が抜けるのではと静岡県は反対したが、別のダムの水を入れるという話も出て決着がつつきつつあるようだ。膨大な地下水が出る事と、南アルプスの保護の事が大きな問題となっており、静岡県知事は了解していないとよく新聞に出る。

アセスメントをやる段階で工事着工は前提になってしまっているが、膨大な残土をどこに置くかは決まっておらず、残土を処分する段階で環境保全を考えながらやっていこうという事になっているので、工事はすでに着工しているのに問題が起きてきている。残土を処分する予定地にはハナノキが自生している。ハナノキは長野県の飯田市から岐阜県の東濃地方、御嵩町の予定地に多く自生している絶滅危惧種の木である。予定地にはタカの仲間のサシバ、サギの仲間のミゾゴイが生息しており、それらは数の少ない鳥なので影響を心配しており、野鳥の会は計画見直しの要望書を提出した。

処分地の候補地は2か所あり、1つは民有地、もう一つは町有地である。この辺りは湿地でハナノキが80本以上自生しており、他の面白い植物もある。何年か前の大雨で洪水が起き、土砂崩れが起きた所でもあり、そのような地域に残土を盛るということで、上之郷地区リニア残土を考える会が発足し各町内会からの代表が参加し、安全面で強く反対している。環境面からは自然の愛好家などの地元で頑張っている人たちが、鳥や植物の調査を2015年から7,8年ほど続けてきた。こういった流れの中で、前町長は残土の受け入れを容認すると言ったため、住民から反発が起き、一昨年JR東海を呼んで環境フォーラムが開かれることになった。この地域はウラン鉱がある事からその専門家なども参加した。また昨年度フリージャーナリストが、この地区が環境省の重要湿地になっていることを記事に書き、住民からは安全面だけではなく自然環境の面でも守るべきという声が上がった。そのため收拾がつかず前町長は辞任し、新町長は白紙に戻して検討するとして昨年11月から審議会をもうけて議論し、その結果をもってJR東海と交渉することになった。

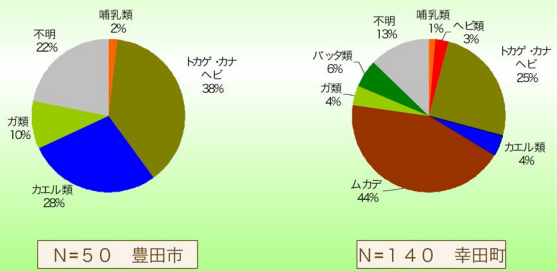
掘ると天然由来のヒ素などを含む土が出る恐れがあるが、それを置く計画もある。他の地域ではヒ素が流出し魚が死んで浮くということも起きているため、懸念されている。有害土を置く所、健全な土を置く所、それらを埋めたいというのがJR東海の計画である。

サシバは里山という環境に生息する。ミゾゴイはサワガニなどを食べるので、湿った谷地形のところにいる。ハナノキは雌雄異株なので雄花と雌花があり5月に花が咲き秋にも紅葉がきれい。重要湿地になったのもハナノキがあるからである。

サシバの繁殖地は秋田・岩手から南で鹿児島島辺りまで、越冬地は南西諸島・東南アジアでフィリピンに多く見られる。奄美大島から南の沖縄でも冬に見られる。日本へは4月に渡ってきて子育てをして7月初めに巣立ち、秋に渡っていく。愛知県の伊良湖岬や長野県の白樺峠などが渡りで有名である。御嵩町の予定地でも2番が観察されている。枯れ枝を組んで巣を作る。ヘビ・カナヘビ・カエル・ガの幼虫などを餌としているので、里山に生息する生き物がいない

## 餌動物

(無人カメラによる巣内育雛期の記録)



と生きられない。サシバがいるということは、いろいろな生物がいるという証拠である。猛禽類は生態系の頂点におり、環境が悪くなると真っ先にいなくなる。

サシバの保護活動は国際的なつながりの中でやっていこうと、越冬地のフィリピンへ行って現地の人たちと交流している。かつて日本の宮古島・沖縄などでサシバを食べていたようだが、フィリピンの北のほうでも密猟されていた。それを何とかしたいと思っていた地元関係者と日本の NGO が協力して行政を動かし保護活動を行っている。

一つはエコツアーとしてお客に来てもらい、自然保護に関心を持ってもらう。また地元の人にも関心を持ってもらうなどを野鳥の会、日本鳥類保護連盟、アジア猛禽類ネットワーク、日本自然保護協会が中心となって交流している。サシバサミットもやっており、栃木県市貝町、宮古島、去年は台湾で、今年はフィリピンで行う。現地でサシバ保護が盛んになったのは、ヤシを食べるコガネムシの仲間の幼虫をサシバが食べてくれるということで、行政が積極的に動き保護が必要と認識されたようだ。

サシバは環境省の絶滅危惧種Ⅱ類になっている（2006年になって変わっていない）。御嵩町の予定地では2番のサシバが確認されているが、その内の1番が埋め立て予定地の近くで確認されたため影響があると懸念し要望書を提出した。

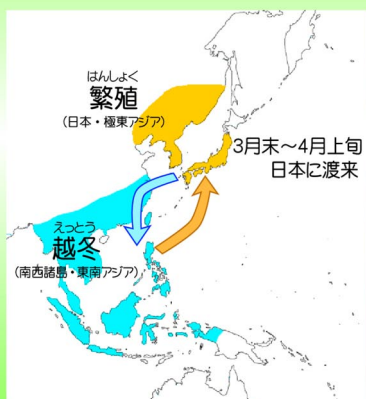
ミゾゴイはサギの仲間で森の中で単独で営巣する。4月中旬に渡ってきて繁殖し7、8月に巣立つ。暗くなるとボーボーと鳴くが姿は中々見られない。巣は横枝にかけるので発見しやすい。日本でしか繁殖せず、環境省のレッドリストに入っている。また国際自然保護連合(IUCN)のリストにも入っている。一時は1000羽位といわれていたが、もう少しいるかもしれない。冬には東南アジア、フィリピン辺りに渡るといわれているがよく分かっていない。御嵩町の80才近い人が子供の頃から声を聞いたと言っているのだから、繁殖していることはわかっている。

日本生態学会で昨年3月に、埋め立てないで欲しいという要望書を出しており、8月3日付で日本野鳥の会と岐阜支部の連名で新町長に鳥類保護の観点から御嵩町・岐阜県・国交省・環境省・JR 東海宛に要望書を提出した。

リニア残土の町の審議会は14人がメンバーで、その内9人が自然保護関係や地元などの反



## サシバの繁殖地と越冬地



対派が入っており、野鳥の会にも声がかかり参加することになった。審議会では要対策土（有害土）については全会一致で受け入れをやめようということになった。盛土については専門家が計算上安全という結果を示し、その確認を行った。埋め立て予定地は自然環境の点で重要な所だという確認はなされたが、民有地の多い地区については既に JR 東海が購入していることがわかり、仕方がないのではないかという意見、埋め立ては別の所でもできるのではという意見、やめるべき、やむを得ないなどの意見が出てまとまらなかった。答申は両論併記となり、今後は町長が JR 東海と交渉することになるが、これからが正念場である。

### 大阪万博と野鳥保護について

夢洲（ゆめしま）は万博予定地で、向かい側



には南港野鳥園があり近くに新島（新しい埋め立て地でコアジサシ等が繁殖している）もある。夢洲は産廃や浚渫土などを埋め立てた所である。現在万博会場の夢洲で野鳥を守ろうと大阪自然環境保全協会や野鳥の会大阪支部、日本自然保護協会、WWF（世界自然保護基金）ジャパンが頑張っている。

埋め立て地を作ると土と一緒に海水も入るので自然のため池や草地ができ良い自然環境が整う。泥を入れると干潟状になり、海水もあるのでエサが多くて野鳥がたくさん来る。ここでは池もできたのでホシハジロやコアジサシ、セイタカシギもみられた。ホシハジロは世界的にも減少傾向であるが、ここでは多く見られ、ラムサール条約湿地の基準をクリアするほどであったが、今は埋め立てが始まり少なくなってきた。セイタカシギも 10 数番繁殖していた

が、昨年は 1 番しか観察されなかった。コアジサシは草のない裸地で繁殖するが造成工事が始まり繁殖をやめて新島のほうへ移っていった。

野鳥の生息環境が整ってきているので、生物多様性保全をテーマにしている万博ではこれらの環境を生かしながらやってもらえないかという運動を続けている。万博そのものの是非もあるが、一方で貴重な自然環境と鳥類を残そうと運動している。

### 勇払原野の風力事業と鳥たち

苫小牧市を中心とする平野に勇払原野がある。工業開発などで都市化はしているがまだまだ貴重な自然が残っている。ウトナイ湖のほとりに野鳥の会が日本で初めてサンクチュアリを設置しネイチャーセンターがある。ウトナイ湖に水を入れている美々川の上流近くには千歳空港がある。美々川の源流に半導体工場の巨大なものをつくることになり、大量の水が必要で苫小牧東部開発用地からパイプラインで水もっていかうという話がでている。この辺りにはタンチョウもいてガンもたくさん来る。野鳥の会ではウトナイ湖を中心に一体の保全を考えていこうと取り組んでいる。

ウトナイ湖は 1m あるかないかの浅い湖で、様々な水草が生え日本でも有数のガン、カモ、ハクチョウがやってくる。日本で 4 番目のラムサール条約湿地となったところで、環境省がウトナイ湖野生鳥獣保護センターを作り苫小牧市が管理し、市からの委託で野鳥の会のレンジャーも 1 名いる。ここにはかつてシマアオジという雀くらの小鳥がいたが、今はいなくなった。この鳥は日本では北海道でのみ繁殖しており、全滅状態で今はサロベツ原野に数番いるかどうかというところである。急激にいなくなった。

#### ウトナイ湖サンクチュアリ

#### ウトナイ湖野生鳥獣保護センター（北海道苫小牧市）

- ・ 本会直営のサンクチュアリと 2002 年にオープンした保護センター（苫小牧市より受託）の 2 施設で保全活動を展開。
- ・ ラムサール条約登録湿地。東アジアガンカモ類重要生息地ネットワークにも参加、個体群移動に関する情報提供、教員向け教材開発を実施。
- ・ ウトナイ湖を含む勇払原野の保全に取り組んでいる。



その一面の浜厚真に風力発電の設備を作ろうという計画がある。事業主体は大阪ガスである。この辺りには荒涼とした原野環境が残っており、予定地の真ん中でタンチョウが繁殖する事もあり、タカの仲間のチュウヒや絶滅が懸念されるアカモズが2～3番みられる。8～10基

の風力発電線装置ができる予定だ。既にアクセスが始まっており、工事着工前提であるが、野鳥の会、北海道自然保護協会や生態学会などから中止要望の意見書を提出したが、着工の話は進んでいる。

※掲載写真の転載は厳禁

## 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 第24回総会

3月2日（土）高山市民文化会館で第24回の総会が開かれました。下記資料の議案について審議が行われ、いずれの議案も賛成多数で承認されました。

## 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 第24回総会

2024年3月2日（土） 高山市民文化会館

### 第1号議案

#### 2023年 会務・事業報告

##### ※会務報告

- 1) 会員状況2023年12月末会員数 個人・家族会員：70 団体：3 計73
- 2) 会議関係第23回総会 2023年3月4日 運営委員会：11回開催

##### ※事業報告

- 1) 環境講演会 3月4日 「南限のライチョウ」  
講師：朝倉俊治氏（静岡ライチョウ研究会）
- 2) 自然観察会 6月25日 六厩（荘川町）自然観察会 参加者：23名  
7月2日 御嶽山自然観察会（胡桃島キャンプ場から）  
7月23日 水生昆虫調査（川上川）参加者：16名  
10月1日 里山こみちハイク（上野平～三仏寺城趾）  
講師：住寿美子、田口勝（会員）参加者：20名
- 3) アサギマダラマーキング会 9月3日 指導：鈴木俊文氏（会員）参加者：29名
- 4) くらがね通信の発行 1月、4月、7月、10月（No.88～91）
- 5) 自然談話室 6月13日 「クマタカの保護と生物多様性」  
講師：直井清正氏（会員）参加者：31名
- 6) 環境整備（有志参加）10月21日 ギフチョウ生息地下草刈り（清見町大原地区）  
11月4日 チャマダラセセリ生息地下草刈り（高根町日和田地区）

### 第2号議案

#### 2023年 収支決算報告

##### <収入の部>

項目	金額	備考
2022年繰り越し	275,087	
会費	個人	108,000 @ 2,000 × 54
	家族	42,000 @ 3,000 × 14
	団体	15,000 @ 5,000 × 3
その他	寄付	10,000 丹羽宏様
合計	450,087	

<支出の部>

項目	金額	備考
会議費	4,230	文化会館使用料等
通信費	40,204	ハガキ・切手・封筒
事務費	9,330	FAX・コピー・事務用品
印刷費	51,700	くらがね通信(年4回)発行
事業費	98,600	講演料・保険+手数料
合計	204,064	

450,087円(収入) - 204,064円(支出) = 246,023円(2024年に繰り越し)

<監査報告>

監査の結果適正に処理されていると認めます。

2024年 1月16日  
 米澤 智子  
 向日 直一

第3号議案

2024年事業計画

- 1) 第24回総会 3月2日 高山市民文化会館
- 2) 環境講演会 3月2日 「野鳥も人も地球のなかま」  
 ~御嵩町リニア残土計画、大阪万博、勇払原野風力事業と野鳥たち~  
 講師：大畑孝二氏(日本野鳥の会 施設運営支援室)
- 3) 自然観察会 ライチョウ観察、石仏探訪、水生昆虫調査など
- 4) アサギマダラマーキング会 9月初旬 講師：鈴木俊文さん
- 5) 公開講座「自然談話室」、学習会、出前講座など 随時
- 6) くらがね通信の発行 年に4回程度発行
- 7) 要望書・提言書などの提出、環境整備ボランティア、その他

第4号議案

2024年収入支出予算

<収入の部>

項目	金額
繰越金	246,023
会費	150,000
雑入	
合計	396,023

<支出の部>

項目	金額	備考
会議費	5,000	
通信費	40,000	
事務費	10,000	
印刷費	50,000	
事業費	100,000	
予備費	191,023	
合計	396,023	

第5号議案

運営委員の選任

副会長に 蓑田健介さん、松崎まみさんを選任  
 新たに住之義さんを選任

その他：サクラソウ自生地について

## ★★★会費納入のお願い★★★

2024年会費が未納の方には下記口座に早急に納入されるようお願いいたします。

振込先 乗鞍岳の自然を考える会

郵便振替 00800-8-129365

年会費 = 個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円

## 行事予定

### ☆自然談話室 「モンゴル蝶類調査報告」

日 時：5月23日（木）午後7時～

会 場：高山市民文化会館（2-5）

講 師：鈴木俊文さん

昨年、モンゴルで蝶を含め様々な動植物を調査・観察して来られた鈴木さんに、お話をさせていただきます。

### ☆乗鞍岳自然観察会 7月7日（日）（小雨決行）

集合場所：丹生川支所駐車場 午前7時（15時頃に現地解散予定）

持ち物：お弁当、飲み物、双眼鏡、雨具、防寒着等（必携）

乗鞍スカイラインは恐らく通れないので、乗鞍高原経由で行く予定です。乗鞍高原からは定期バス利用。ちょうどお花畑が見頃の時期を選びました。もちろんライチョウの親子も観たいですね。

### ☆水生昆虫調査

7月28日（日）午前9時～（午前中で終了、小雨決行・増水時は中止）

詳細は次号でお知らせします。

### ☆ギフチョウ生息地観察会

4月18日（木）午前9時～（午前中） 清見町大谷 西光寺

清見小3年生が西光寺の周辺でギフチョウの観察会します。指導は鈴木俊文さん。ウスバサイシンの葉裏にギフチョウの卵塊が見つけれられるかもね。福寿草はまだ咲いているかな？

※行事の問い合わせ先：

松崎（090-4214-5208、[ioauregihserimus@hidatakayama.ne.jp](mailto:ioauregihserimus@hidatakayama.ne.jp)）

■ 会員を募集しています！ 年会費 = 個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円

あなたの知人、友人に入会をおすすめください

・郵便振替 00800-8-129365 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第号(93号) 2024年4月15日発行

発行者 乗鞍岳と飛驒の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町4-218-3 飯田 洋

TEL：0577-32-7206・FAX：0577-32-7207

下記URLのページからくらがね通信のバックナンバーが閲覧できます。

★ <http://iidalaw.net/kuragane.html>

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者：松崎 茂

E-mail：[ioauregihserimus@hidatakayama.ne.jp](mailto:ioauregihserimus@hidatakayama.ne.jp) TEL：0577-34-4703

表紙写真提供：小池 潜 印刷：山都印刷